第２部
緑区あれこれ

第１章　緑区の誕生まで

１　原始・縄文・弥生・奈良時代の緑区

緑区の誕生

緑区にはいつから人々の営みが始まったのでしょう。人が暮らした足跡が遺跡として多く残されています。大昔は「古東海湖」と呼ばれる湖の底でした。この湖底に積もった石や土砂が地殻の変動により隆起して陸地となり、緑区がつくられることになりました。人が登場するのは今から数万年前の「旧石器時代」と考えられています。このころは、今ほど暖かでなく、ナウマンゾウやオオツノシカなど大型哺乳類もいて、人々は移動しながら大きな石をたたいて作った打製石器（だせいせっき）を使って動物を捕らえて食料にしていました。遺跡が発掘されたわけではありませんが、少し高くなった鳴海の中新田周辺と大高の平野周辺では小型の石器が見つかり、最初の人々の存在を知る手がかりとなっています。

石器の材料黒曜石

縄文時代

暖かな気候となり、ブナなどの木々が茂るようになった「縄文時代」に入ると土器が作られるようになり、海岸近くに少数の人達が定住生活を始めています。このころ、大型の哺乳類は絶滅し、小動物や貝類が豊富になりました。遺跡は鳴海・大高ともに多く見つかっています。縄文時代の遺跡で最も早く発掘されたのは鳴海の「雷（いかずち）」貝塚で、昭和２（1927）年に発見されています。貝塚からは食糧としたハイガイなど貝類に混じって、人々が身に付けた耳飾りや勾玉のほか石鏃、石斧など多くの遺物が出土しています。また、歯を抜いたり三叉に削るなどし、手足を折り曲げて葬られた人骨35体も見つかっています。発見場所は矢切ですが、旧字名をとって命名されました。市内の代表的な縄文晩期の遺跡で、標高15㍍の鳴海潟に向いた西斜面、

鳴海小学校矢切の丘

鳴海小学校の北側一帯で、鳴海小学校にも遺跡の一部、貝層や住居跡が残っており、壊さないように土盛をして「矢切の丘」として保存されています。このほか、鳴海には上ノ山貝塚、光正寺貝塚、清水寺遺跡、鉾ノ木貝塚、大根貝塚があり、大高には斎山（いつきやま）貝塚、氷上山貝塚、菩薩遺跡、折戸遺跡などがあります。いずれも、今は海から遠く離れていますが、この時代には渚が近くにせまる少し高くなった土地で、豊かな木の実だけでなく、貝類や魚など海産物を取ったりするのにも便利だったようです。

鉾ノ木貝塚

鉾ノ木貝塚

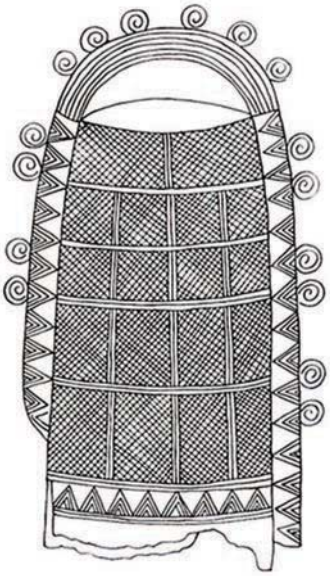
鳴海潟に面した丘陵の海岸に近い斜面にあります。面積はあまり広くありませんが、厚さ70㌢の貝層のうち、下層はハイガイの生育が悪く、上層は生育のよい貝ばかりです。遺物は縄文前期の土器ですが、下層からは、やや厚い縄文のある土器とともに薄手の細線文土器を出すのに、上層では爪形文・羽状縄文をもつ土器を主体として、すべての点で上下二層の間に相違があります。市内に残る唯一の縄文式貝塚で、見つかった土器は「鉾ノ木式」と名付けられています。

【メモ　縄文土器】

今から約１万年前に始まったとされる縄文時代。「縄文土器」という名前は縄目もようの土器が多いことから名づけられました。その形や絵柄は個性豊かで、芸術性の高い装飾や文様を持っています。自然の恵みをうまく利用するために縄文土器が生まれ、食器としてだけでなく調理や保存道具として活用されました。旧石器時代は、石と木、骨、角などでできた道具だけで生活をしてきました。土器が登場するまでの調理法は干す、焼くくらいで、食料資源はごく限られたものでした。土器によって食べものを「煮る」という調理法も生まれ、食生活は豊かになり、食べられる食材も増えました。ほかにもいろいろな目的の道具が作られました。呪術性を持った、宗教的・精神的な土器もあります。縄文土器には、自

然（火･太陽）や人間、動植物など色々な形や文様を描いたものがあります。これには自然の恵みなしでは生きられない縄文人の自然への感謝と豊穣への祈りがこめられていました。

弥生時代



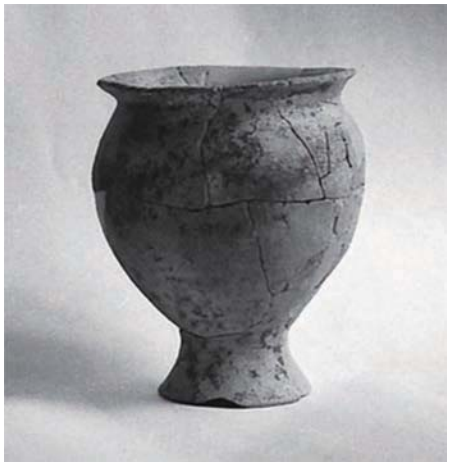
伝鳴海海底発見の銅鐸図

東京都文京区弥生町で最初に土器が見つかったことで弥生時代と呼ばれています。大陸との交流で稲作と青銅器・鉄器が伝わりました。米の栽培がおこなわれるようになったほか、鉄器を利用することで狩りの成果も大きくなりました。

食料が安定して食べられるようになり、人々が定住するムラができました。稲作は豊かさをもたらしました。災害などに備えて高床式倉庫に保存し、水田を広くするなど増産に取り組みました。稲作は天候に左右されやすく、日照りが続けば水の取り合い、不作の年には蓄えた食物の奪い合いなど、ムラとムラの争いが起きることにもなりました。

弥生時代の足跡は、縄文時代の遺跡と重なるところもありますが、丘から水田に適した低い土地にも遺跡が広がりました。鳴海では前之輪遺跡、諏訪山遺跡、矢切遺跡。大高では西大高遺跡、大高畑遺跡、姥神遺跡などが知られています。弥生時代に造られた青銅器の銅鐸が鳴海の海底から見つかりました。この銅鐸について、寛政５（1793）年、尾張藩江戸屋敷の余慶堂で銅鐸を見た大田南畝は『半日閑話』に絵入りで説明を書いています。また、『山家樵談』にも図が掲載されていますが、実物は所在不明になっています。袈裟襷文で鈕には身についているのと同じ形の耳が三個左右についています。銅鐸は祭りで使われたと考えられています。扁円形の釣鐘のような形で高さは１㍍前後、集落遺跡では発見されず、人里離れた山中などで見つかる場合が多く、最初は釣り下げ鳴らすものでしたが、次第に形が大きくなり装飾化され宝器となりました。豊作を祈り収穫に感謝する祭り以外は、人の目に触れぬ場所にそっと埋められたのではないでしょうか。銅鐸は始め近畿地方で造られ地方へと広まり、東海地方では「三遠式銅鐸」と呼ばれる銅鐸が造られるようになりました。弥生時代の遺物の中に、銅鐸と同じ形をした土製の鐸が見つかることがあります。手に載るほど小型ですが模様や形は銅鐸と同じです。土製の鐸は銅鐸を手に入れることの出来ない人達が真似て造ったと言われていますが、遠くにある本物の替わりに手元に置くために造ったのではと思います。豊藤稲荷神社には見晴台遺跡で見つかった土製の鐸が保存されています。

【メモ　弥生土器】



初期鉄器時代に使用された素焼の土器です。弥生時代の土器は縄文時代のものと比べ、色や形が大きくちがいます。縄文土器より高い温度で焼かれたため赤茶色をして形もシンプルです。また、農耕がはじまったことで生活もそれまでとは変わりました。土器は色々な用途に合わせて形を変え利用されるようになります。煮炊き用の甕、貯蔵用の壺、盛り付け用の鉢などが作られました。また、高坏のような祭祀用の土器も多く作られました。

古墳時代

弥生時代に大陸から伝わった文化の波は生活に変化をもたらしました。人々は農耕に便利な低地に集落をつくり、作業の共同化へと進んでいきました。集落をまとめるため力のあるものが登場し、これが支配者階級へとつながりました。支配者は見晴しの良い高台に古墳を築くことで権力を示しました。

大塚古墳　昭和53年

緑区にも多くの古墳があります。大高の斎山古墳が築造年月も古く大きいものです。標高30㍍の高さにあり、古墳の上に斎山稲荷が鎮座しています。一部削られていますが前方後円墳と考えられています。周囲から埴輪片が採集されています。斎山古墳は隣接する東海市名和の兜山古墳や三ツ屋古墳とのつながりが考えられます。

鳴海には新海池の一帯に古墳が集まっていました。大塚古墳、赤塚古墳、薬師山古墳、大根古墳、狐塚古墳などがありましたがほとんど消滅し、大塚古墳と赤塚古墳跡だけが残り、名古屋市文化財として高札が建てられています。大塚古墳は新海池の西に築かれた円墳で横穴式石室の入口が南東に向かっています。天井石はすべてなく石室の側壁だけが残る状態でしたが埋め戻され、直径20㍍、高さ３㍍の円墳に修復されています。内部から人骨、金環、鉄鏃、土器片が見つかっています。赤塚古墳は昭和５（1930）年に大塚古墳と

赤塚古墳跡

共に耕地整理で発掘調査され、人骨のほか勾玉、直刀など遺物が出土しています。側壁もなく基底石だけが敷き詰められた状態で古墳跡として残っています。大化２（646）年の大化の改新で孝徳天皇が薄葬令を出し古墳を造ることを禁じました。大宝３（703）年には持統天皇を天武天皇陵に合葬にあたり、天皇として火葬の先例を開いたことで、人々も仏教による火葬の風習に従うようになり、７世紀の終わりには造られなくなりました。

鳴海小坂に塚の上で飛び跳ねるとドンドンと音が響くことから「ドンドン塚」と呼ばれる小山（古墳状隆起）高さ2.3㍍が畑のなかにポツンとありました。名古屋市遺跡分布図で遺跡番号14－67古墓「ドンドン塚」と掲載されていました。環状２号線（国道302号線）の建設予定地内にあったことから、住民らが「どんどん塚をみまもろう会」を結成するなど注目を集めました。昭和63(1988)年に発掘調査が行われました。出土した遺物は常滑焼大甕２個分の破片で、古墳と認められる遺構・遺物は発見されず「古墳」ではないことがわかりました。人工的に作られた土盛の遺構で、民間信仰や土地境界の標識として作られたと考えられます。

ドンドン塚　昭和55年

古窯跡

名古屋市東部には「猿投山西南麓古窯跡群」に属する古窯跡が広がっています。須恵器と呼ばれる焼物が生産されるようになり、緑区では大高から有松、鳴海に窯跡が広がっています。特に鳴海東部の小坂・徳重・乗鞍から扇川を南に越えた亀が洞一帯に広く分布しています。窯が多いのは窯を築く丘陵地が広がり、原料となる良質の粘土、燃料となる松が手に入りやすかったと考えられます。製品は扇川を利用して都などに送られました。

亀が洞の「亀ヶ洞１号窯」は、熊野社南東の谷を隔てた標高30㍍の丘陵斜面にありました。昭和34（1959）年に調査され、見つかった品は灰釉が施された碗、皿、小瓶などに混じり、白色胎土瓷器で腰部に稜のある杯、香炉などで花、蝶、雲などの模様で飾られたも

のや「四満」「道」などの陰刻もありました。また器全体に黄褐色釉や緑色釉のかけられたものも多く、地上窯で平安朝瓷器第一型式の古い窯跡であると考えられています。

また、徳重東部土地区画整理地内で完全な形を残す古窯（ＮＮ283号）が見つかり、名古屋市教育委員会が発掘調査をしました。窯は奈良時代の窯で、山の頂上付近の斜面にトンネルを掘って造られており、長さ６㍍、最大幅２㍍ありました。窯の多くが焼成の途中に崩れ落ちて放棄される窯が多い中で、製品を窯出しした後になんらかの理由で放棄されているため、窯本体が良好な状態で発掘されたと考えます。遺物は窯内部にはほとんどありませんでしたが、窯の下斜面に広がる灰原からは杯、杯蓋、長頸瓶、瓶などのほか、珍しい陶塔の一部を含めて、コンテナー50箱分の遺物が出土しました。

亀ヶ洞古窯発掘調査　昭和60年

【メモ　古窯】

緑区には奈良、平安、鎌倉時代まで続く古窯跡が多くあります。窯数は約100基にのぼりますが、開発などで消滅したものも多くあります。丘陵が多く窯を造りやすい地形、燃料となる木、水、原料の粘土、製品を運ぶルートの条件が揃っていたと考えられます。粘土は現在も火山活動を続ける御岳山など、北アルプスの山々がその昔噴火したときの火山灰などによって作られた花崗岩が風化したものです。５世紀の後半から６世紀のはじめごろになると、地面に穴を掘って泥で屋根を覆った「丸窯」から丘陵などの斜面を利用し、階段上の部屋を造り、下部に焚口、上部に煙道を持つ「登り窯」へと発展し、須恵器が造られるようになりました。須恵器は縄文・弥生の赤褐色の

土器とは異なり濃いねずみ色をしています。これは縄文・弥生式土器の焼成炎は酸性であり、須恵器は還元であることを示しています。須恵器をたたくと金属器に近い音がするのは、きわめて高い火力で焼き固められていることを物語っています。須恵器も大陸から伝来した窯技で『日本書記』に雄略天皇７年に新漢陶作部高貴などの「陶工」を大和に定住させたと書かれています。須恵器の焼成方法が伝えられたころは古墳時代。墳墓から発見されるような盤、坏坩（壺）など宗教儀式用と思われる祭器も多く作られました。飛鳥時代、奈良時代になると、色釉で彩ったもの、緑色を主体とし、白褐色をおびた三彩のものも作られるようになりました。平安時代に入ると奈良時代とはまた違った植物性の灰を原料とした釉かけが行われる施釉陶器の時代となり、摂氏1200度以上の高い火勢でガラス化した灰釉須恵器が作られました。このような灰釉のかかった須恵器の素地土は白色調が顕著になったことも見逃せません。緑釉で彩った陶器も焼成されています。しかし緑釉陶器は須恵器に比べるとわずかで、窯跡も数箇所しか見つかっていません。

日本武尊の東征と緑区

尾張名所図会　日本武尊が宮簀媛命に神剣託す

古墳時代は、大和を中心とした中央集権国家への過渡期となり各地の豪族を統一するため勢力争いがくり広げられました。『古事記』『日本書紀』に物語として記載され、大高が舞台となっています。また、鳴海にも碑や伝承が残されています。

景行天皇は三河より東の国が従わないため、日本武尊に征伐に向かうよう命じました。伊勢神宮で草薙神剣を倭姫命より授けられた日本武尊は、大高の氷上山で尾張国を治める乎止与命の館に立ち寄り宮簀媛命を見初めました。海路で東国へ赴き大役を果たして無事に尾張国氷上館（大高）に凱旋し、乎止与命のむすめ宮簀媛命と結ばれ、氷上館に滞留することになりました。二人は打ち寄せる波の音を聞きながら平和な日々を過ごしていました。日本武尊は伊吹山に賊ありと聞き、草薙神剣を宮簀媛命に託し出発しましたが、途中で病に倒れて伊勢にて逝去したとされます。草薙神剣は宮簀媛命の晩年に熱田に移されて祀られました。これが熱田神宮の起源で、大高町の氷上姉子神社は宮簀媛命を祀ったものです。

日本武尊は実在の人物ではなく、数多くの大和の勇者によるいくたびかの征討の伝承が

一人の英雄に形象化されたものとされています。大高には日本武尊と宮簀媛命が打ち寄せる波に目覚めたロマンスの故事から「寝覚めの里」碑が建てられています。熱田区の神宮公園にある東海地方最大の古墳「断夫山古墳」は、宮簀媛命の墓とも伝えられています。日本武尊が火高（大高）を望んで詠んだ歌。万葉がなで書かれた「奈留美良乎　美也礼波止保志　比多加知爾　己乃由不志保爾　和多良部牟加毛」が伝えられています。

寝覚の里

寝覚の里碑　昭和56年

日本武尊ゆかりの「史跡・寝覚の里」の石碑。東海市との境に、道路から一段高く自然石に宮簀媛命とのロマンスが刻まれています。伊勢湾台風で台座から折れましたが建て直されています。

景行天皇の皇子・日本武尊が東国の蝦夷を討伐しての帰途、大高の尾張の始祖・乎止与命の館に落ち着きました。そして宮簀媛命を妃に迎えました。この辺は海水が満々と打ち寄せていて、二人は毎朝、海潮の波の音で目を覚ましたことから「寝覚の里」と呼ばれるようになりました。

碑は、日本武尊と宮簀媛命とのロマンチックな生活を記念すべき碑で、明治43（1910）年、角田忠行熱田神宮宮司がその由来を書いたもので、尊を偲ぶ唯一の碑石です。碑石には「大高の里の寝覚の地名は、千八百年の昔、倭武天皇が火上の御座所にいたとき、毎日朝になると波の音に目覚めたところから付いた。この地名を長く伝えるために」と書かれ、碑裏には発起人山ザキ右近と彫られています。

氷上姉子神社

火上山と呼ぶ丘陵地にあります。祭神は宮簀媛命で、熱田神宮の摂社です。『延喜式』延長５（927）年に氷上姉子神社とあり、『尾張国内神名牒』貞治３（1364）年には「従一位上氷上姉子天神」とあります。宮簀媛命の没後その館跡に、仲哀４（195）年、社を建てたのが創始とされています。尾張氏が古くここに住んだことを物語っています。神社の名称「氷上」は鎮座地。「姉子」は日本武尊が宮簀媛命を偲んで詠んだ「年魚市潟　氷上姉子は　我れ来むと　床去るらむや　あはれ姉子」からつけられたと『尾張国熱田大神宮縁起』に記されています。氷上がすなわち大高の地で、大高はもと愛智郡に属していました。大高は火高の転じたものとされています。

祭典は、太々神楽、頭人祭、大高斎田御田植祭、例祭、大高斎田抜穂祭などが行われま

す。伝説によると「あるとき雷が落ち祭神に捕まった。太鼓を取り上げられ、大高には決して落ちないと約束して許された」とされ、太々神楽の大麻をいただけば雷除けになると伝えられています。

成海神社

日本武尊が東征に舟で出帆し陸路で凱旋した縁起で、乗船したとされる天神山に朱鳥元（686）年に創建されたと伝えられます。祭神は日本武尊、宮簀媛命、建稲種命。延喜式内社。お年寄りにオトグまたオトゴさんと呼ばれる神社は、応永年間に鳴海城（根古屋城）の築城で乙子山に移転しました。10月秋の例大祭では、日本武尊の伝承から御舟流しの神事がおこなわれます。昔は夜には花火大会も開かれていました。『愛知郡誌』に「成海神社には古来よりの例祭あり、毎年七月八日神輿を天神山（御旅所）に遷し木板三片に社号を書き扇川に流す。之を御舟祭と称す。この故事は輿を天神山に遷すは旧社殿跡なるがため、また御舟祭の儀式は日本武尊東征のとき、御乗船この地より発せられしに因む遺風なり」とあります。

御舟流しは「大日本洲尾張国愛知郡　成海神社」「疾病消除」「御三神船」と書かれた木板３枚を扇川に神官が流すもので、板を拾うと安泰に過ごせるといわれ、川の中で木板が流されるのを人々が待ち受けます。

古代寺院

百済から538年、朝廷に仏像と経典が贈られ仏教が日本に伝えられると、百済から瓦博士など技術者が渡来し寺が建立されるようになりました。推古17（609）年に建てられた法興寺（飛鳥寺）が我が国最古の寺ですが、７世紀～８世紀にかけて官寺である国分寺や、豪族らによる寺院が各地に建立されました。書物などの記録はほとんどありませんが、発掘された瓦から緑区には大高（大高廃寺）と鳴海（鳴海廃寺）に寺があったことがわかります。

複弁蓮花文軒丸瓦（円竜寺蔵）

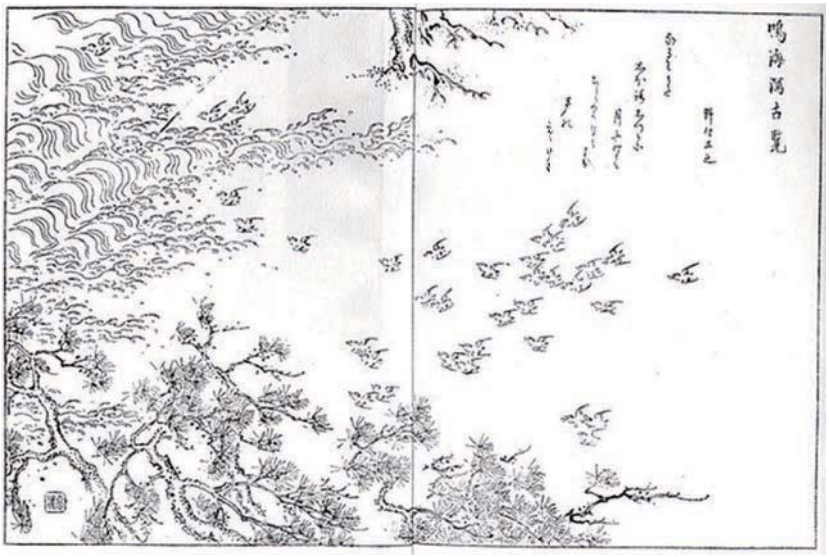
均整唐草文軒平瓦

2　成海郷の形成から戦国時代

成海郷

大和の王がしだいに大きな力を持ち、５世紀の終りには関東から九州までも、従わせるようになりました。国造の任命はこのころとみられていますが、大化２（646）年の改新の詔によって国郡里制が布かれ、尾張国の名が付けられました。尾張国は、愛知・山田・春部・丹羽・葉栗・中島・海部・知多の８郡から成り、国司・郡司・里長などの官職が置かれました。鳴海、大高、有松は『熱田神宮寛平縁起』によれば、愛知郡成海郷に属していたことが記されています。大高はいつのころからかは明らかではありませんが知多郡に属することになりました。

国郡里制の里は距離の単位として用いられるものとは別で、律令制度における地方行政区の最小単位でしたが、霊亀元（715）年の郷里制の施行に伴い、里が郷に改められて新たに郷に下の小行政区となりました。１郷は２～３里に分割されていましたが天平12(740)年ころ廃止され、里は用いられなくなり郷のみとなりました。



尾張名所図会　鳴海潟古覧

約800年前の平安朝末期に鳴海（古鳴海）宿の遊君が都の高官と深く馴染んだ物語が『平家物語』に残されています。この記載によって当時の鳴海には旅籠があり、繁栄していたことがわかります。また、多くの人たちが鳴海潟の通行の様子などを歌に詠んでいることからも、鎌倉幕府が開かれ鎌倉街道を通行する旅人が頻繁に行き来するようになる前から、すでに多くの旅人が鳴海を通っていたことを知ることができます。また、鳴海は古来より交通の難所として、鳴海潟がよく歌に詠まれています。海の干満の差を利用した街道が、海岸線に沿って笠寺の丘陵地帯まで伸びていました。古鳴海より野並にぬければ、海岸線を通行しなくても熱田の宮までは行くことができましたが、しだいに近道として海岸に沿った道が普及することになりました。しかしこの潮の満ち干を利用する道は、ずいぶん旅人を悩ませたらしく、平安時代からの歌に詠まれているのは、風景の描写と共に、心の不安も多く見られます。平安前期の女流歌人で六歌仙の一人小野小町は「いかでわれ　心をだにもやりてしか遠くなるみのうらみがてらに」と詠んでいます。

恋せよと鳴海のうらの汐ひがた　かたおもひにぞ　しをれわびぬる　　後鳥羽院
哀れなり　何となるみのはてなれば　またあくがれの浦つたふらん　　藤原光俊
祈るぞよ　我おもふこと鳴海がた　さしひく汐も神のまにまに　　阿 仏 尼
鳴海潟汐の満干の度ごとに　路踏みかふる浦の旅人　　宗良親王
鳴海潟夕なみ千鳥立かへり　友呼続の浜になくなり　　厳阿上人

など鳴海は多くの歌に詠まれています。

鳴海長者太郎成高と玉照姫

尾張名所図会　笠寺縁起

成高は鳴海の豪族（長者）で瑞泉寺はその屋敷跡と伝えられています。この鳴海長者の家に仕える娘がいました。ある雨の日、観音像の前を通りかかった娘は、雨にぬれた観音を不憫に思い、自分のかぶっていた笠を差しかけて帰りました。観音像は、天平５（733）年、呼続の浦に流れ着いた光る霊木で善光上人が十一面観音を彫り、安置するため小松寺を建てましたが、いつしか寺は朽ち果てて、観音像も雨にさらされるようになっていました。左中将藤原兼平は東国に任務で下る途中、成高邸に宿泊して娘の話を聞き、心根の優しさに感じて、都へ連れて帰り妻としました。娘はそれから玉照姫と呼ばれるようになり、幸せに暮らしたとされます。

延長８（930）年、兼平・玉照姫夫妻はこの寺を再興し、笠をかぶせた観音像にちなんで笠覆寺と改めました。通称笠寺観音と呼ばれています。『尾張名所図会』には、雨の中で観音像に傘をさしかける玉照姫と、通りがかった兼平出会い場面が描かれています。瑞泉寺は鳴海城を築いた安原備中守源宗範の創建で、諏訪山から鳴海長者屋敷跡に移っています。

瑞泉寺

曹洞宗、龍蟠山と号す。永徳元（1381）年、大徹宗令が鳴海の平部山に庵を結び、人々を教化したのに始まり。嘉慶２（1388）年には将軍足利義満が宗令に帰依し、荘田20町などを贈ったといわれます。鳴海城主安原宗範は、応永３（1396）年伽藍を建立しましたが、文明元（1469）年兵火により焼失しました。文亀元（1501）年現在地に移り、正徳年中（1711

～16）寺号を瑞泉寺と改めています。20世呑舟は中興の祖とされ、鳴海の豪族下郷弥兵衛の援助により、宝暦５（1755）年堂宇を完成しました。山門は宇治の万福寺の惣門を模したもので、瑞泉寺の大檀那下里知足が黄檗宗の万福寺との関係から建てられています。構造形式は三間一戸重層、四脚門の黄檗式本瓦葺で、昭和32（1957）年に愛知県文化財に指定されています。墓地には市内で最も古い永正４（1507）年の守悦上人の無縫塔のほか、琉球使節の一員として江戸へ向かう途中に亡くなった中山梁文弼の墓があります。

瑞泉寺　愛知県文化財山門

藤原元命と如意寺

藤原元命について『蛤地蔵縁起』に書かれています。尾張国司藤原元命は尾張に赴任して鳴海に住みましたが、悪人で人々を苦しめていました。冬の寒いある日、元命が遊びから帰る途中、地獄沢にさしかかると小さな流がありました。水は冷たく足を濡らして渡るのをためらい、従者に命じて近くあった地蔵菩薩を刻んだ卒塔婆を引き抜かせ、流に渡して踏みつけて通りました。その罰で元命と従者為家は青鬼に捕らえられ、閻魔大王の前に引かれ、地獄へ送られるところを、仏に姿を変えた地蔵菩薩に救われました。地獄沢の古事として『小治田之真清水』に絵が描かれています。

元命は暫くおとなしくしていましたが、再び悪行をして国司を罷免されました。為家は地蔵菩薩の慈悲を深く感じ、薙髪して雲道開法師となり、康平２（1059）年如意寺を建立しました。最初は青鬼山地蔵寺と称していました。弘安５（1282）年に作町へ移転し、応永20（1413）年に頭護山如意寺となりました。尾張六地蔵の四番札所で、地蔵堂に大きな地蔵菩薩像があります。地蔵菩薩は伝定朝作で、眉間に元命の持仏と伝える小仏が納められ、青鬼と書いた的を射る流鏑馬の祭礼があり、火難除の地蔵としてあがめられたほか、近在の漁師が蛤を奉納し放す風習があったことから蛤地蔵とも呼ばれています。幕府の命で宿駅に時の鐘を鳴らすことになり、鳴海宿は正徳２（1712）年に如意寺に鐘を置き知らせましたが、享保９（1724）年に鐘は廃止となりました。六世玄翁文英は如風で鳴海六俳仙の一人。芭蕉が没したのを聞き、法要を営んで供養塔を建てました。明治24（1891）年、地震で鳴海小学校の仮校舎が壊れたため、文教場が開かれ子供たちの勉強の場となりました。

古東海道と鎌倉街道

道は狩猟や農耕などの踏み分け道でしたが、集落間の交易の道へと変化していきました。そして道は物を運ぶだけでなく、文化文明を伝える道でもありました。道は古代律令国家の成立を契機として重要視されるようになりました。律令古国家は中央集権国家で、地方の収穫物を中央に集めることで中央が栄華を享受する体制であり、中央と地方とを結ぶしっかりとした道が整備されてなくてはなりません。このため支配者は絶えず道の整備に力を注いできました。奈良時代の名僧行基は、民衆教化のため諸国を遊説し、その時の遊説コースを日本国図に表わしました。それによれば、山城から東方への道として「東海道」と「東山道」の二つの道が描かれています。東山道は、近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・陸奥となっており、東海道は、伊賀・伊勢・志摩・尾張・参河・遠江・駿河・伊豆・甲斐・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸で、東北地方は未開の国となっていました。

相原郷の鎌倉街道沿い庚申堂

建久３（1192）年、源頼朝が征夷大将軍に任ぜられ鎌倉幕府が正式に成立すると、京都と鎌倉とを結ぶ道が、最も重要な道として位置づけられることになり、かつて京と辺境とされた東北をつなぐ道が、鎌倉街道として脚光を浴びることになりました。

この鎌倉街道は、東山道より一宮・清州・萱津を経て、名古屋市域を西北から東南に通じ、二村山から三河の八ツ橋へぬけて東海道と結ばれます。この街道の一部を小栗街道（萱津と古渡間）、上野街道（古渡と古鳴海間）とも呼んでいます。

鎌倉街道の名古屋市域の道は、萱津・中村・米野村・露橋村・古渡村・大喜村・高田村・桜村で、緑区内は古鳴海・赤塚・茶屋ヶ根（池上）・相原・石神堂・八ッ松で、のちに古鳴海・嫁ヶ茶屋・赤塚・文木・宿地・相原郷・石神堂・八ッ松から二村山の道ではなかったかと推定されています。当時の緑区の中心は古鳴海で、現在の鳴海町近辺は海辺であり、交通の難所として歌に詠まれる海岸線でした。鎌倉街道は、古い東海道を鎌倉街道と呼んだものですが、それ以前に東海道との名称がみられるのは、天武天皇14（685）年に「東山道は美濃以東、東海道は伊勢以東」と呼ばれたのが最初とされています。

3　大高城と鳴海城。城を取り巻く砦

大高城

大高城跡

大高城は標高20㍍の丘にあり『寛文村々覚書』に東西59間、南北18間とあります。いつ築城されたかは不詳ですが、永正６（1509）年の古文書に城主として「花井備中守」の名がみられることから、室町時代の中期以降の各地に豪族の勢力が伸長した時代ではなかったかと推測されています。大高は大高城の城下町として経営されていたもので三角の辻がいたるところに構えられ、敵に対する防備となっています。

天文弘治（1532～58）年のころには、知多郡東浦の水野忠氏・大膳父子が城主となっています。水野家譜には、文明年中（1469～87）から大高城主とありますが、天文12（1543）年の久米家文書に「大高城主水野大膳亮」とあることから、水野氏は天文の初年（1532）のころから領有していたとみられています。

大高城再現兵糧入れ

このころ大高は、織田・今川両家の抗争地点となり、初め今川方でしたが、水野信元が織田信秀に通じ織田方となりました。しかし、天文21（1552）年鳴海城主山口左馬助教継の裏切りで、今川方の鵜殿長照が城主となりました。桶狭間合戦のあと松平元康（徳川家康）が撤収すると城は廃城となりました。江戸時代には尾張藩家老志水甲斐守が大高など１万石を領して三之丸に邸宅を構えています。

大高城は「家康の兵糧入れ」の城としてでも知られています。平成24（2012）年11月には、桶狭間古戦場保存会の呼びかけで、家康の兵糧入れを再現するイベントが開かれました。米俵を背負った馬と甲冑武者が桶狭間神明社から家康も通ったとされる「大高道」を大高城跡まで歩いて兵糧を運びいれました。

昭和13（1938）年に、鷲津砦・丸根砦と共に国指定史跡となっています。

鷲津砦

鷲津砦跡　昭和52年

鷲津砦は織田氏が今川勢に対抗するために丸根砦とともに築いたもので、大高・丸根・鷲津は三角形の位置にあります。標高35㍍にあり、南北15間、東西14間で堀もあったとされていますが、あきらかになっていません。

桶狭間の戦いでは、今川勢の朝日奈泰朝らに攻められ、砦を守っていた飯尾定宗、その子信宗、織田信平ら大半が討死し砦は落ちました。

現在は「鷲津砦跡」の碑が木々に囲まれた中に建てられています。

丸根砦

丸根砦は鷲津砦の南東700㍍、大高城の東800㍍、標高35㍍の地点にあります。砦の広さは『張州雑誌』に東西20間、南北15間と書かれています。その外に幅3.6㍍の外堀があったとされ、周囲に掘の形を残しています。

丸根砦慰霊祭

永禄３（1560）年佐久間盛重が守り、松平元康の軍をむかえ激戦し落城したところです。この戦いで天文12（1543）年に種子島にポルトガル人が伝えた火縄銃が使われたとされます。

現在「丸根砦跡」の石碑と慰霊碑が建てられています。合戦のあった日に近い日曜日には、慰霊祭が行われています。

鳴海城（根古屋城）

応永３（1396）年室町時代、足利三代将軍義満幕下の安原備中守宗範が、鳴海の領主となり城を築くのに最適の場所を選び鳴海城を築きました。この地にはすでに成海神社（日本武尊の伝説が起源で宮簀媛命の兄弟を祀る）が創建されており、成海神社を乙子山に遷座大造営を行ったほか、諏訪山に瑞松寺（瑞祥寺から瑞泉寺）を建立しました。

鳴海城跡　昭和52年

安原備中守が没すると鳴海城は廃城となりましたが、戦国時代に入ると織田家と今川家の勢力争いの前線基地として復城することになりました。織田信長の父信秀が城を修復させ、山口佐馬助教継父子に守備させましたが、信秀が死去すると信長を見限った山口佐馬助は今川義元に付きました。今川方となった鳴海城に義元は猛将として知られる岡部五郎兵衛を配置して備えとしました。

鳴海城跡公園

桶狭間の戦いでは、今川方の敗北が決まっても城を守り続け、義元の首を貰い受けると開城し駿府に帰っています。

桶狭間の合戦のあと、信長は鳴海城主に佐久間右衛門尉信盛その子甚九郎正勝を任命し鳴海を領させました。天正18（1590）年、豊臣秀次が近江八幡より尾張の領主となり、同年８月城は廃城になったとされます。

正勝は慶長のころ、徳川家康の招きで駿府に向かう途中､城跡を訪ね「故郷も我も昔に鳴海かた　旅寝の袖をしほる斗りに」と詠んでいます。鳴海城跡（天神社）にある碑は、鳴海城を今川義元の命により守った岡部五郎兵衛の子孫である元文部大臣岡部長景の撰文です。

善照寺砦

永禄２（1559）年、今川方についた鳴海城に対して、中島・丹下と共に信長が築いた砦のひとつです。鳴海城と同じ丘陵の東端にあり、『尾張志』では東西24間、南北16間と伝えています。

善照寺砦　昭和初期

永禄３（1560）年５月には佐久間信盛と佐久間左京亮が守備していました。信長は善照寺砦に手兵3000を集結すると、幟旗を並び立て信長が籠城するかのように見せかけました。佐々政次と千秋季忠に兵300を与え、今川本隊の前衛隊に対する陽動作戦に出すと中島砦に移動しました。

砦には老松が何本もありましたが、伊勢湾台風で最後の１本が枯れ記念に棗（なつめ）が作られました。公園となった砦には、鳴海絞の開祖とされる三浦之碑が建っています。

中島砦

中島砦戦い偲ぶ演奏会

丹下・善照寺砦とともに今川氏の侵入に備えて、永禄２（1559）年に織田信長が築いたものです。広さは『尾州古城志』などに東西15間、南北20間とあります。扇川と手越川の合流する三角州の低地にあり、今川本隊から望遠できることから『信長公記』には「信長が移動するのを家臣が止めたが振り切って移った」と書かれています。信長はここから桶狭間に進軍しました。

砦は梶川平左衛門尉が守将で、明治のころまでは、梶川のものとされる小さな塚がありましたが、近くの家に不幸が重なったため、昭和２（1927）年に地元の人たちが「中島城址」碑を建てて追善法要をしています。また、近年は中島砦桶狭間合戦偲ぶ演奏会も開かれています。

丹下砦

永禄２（1559）年に今川義元の西上に備えるための一連の砦として築かれました。土豪の屋敷跡に築かれたもので『尾張志』に東西41間、南北43間とあります。

丹下砦跡　昭和53年

水野帯刀・山口海老之丞・柘植玄蕃允がこれを守備したと『信長公記』に書かれています。桶狭間の戦いでは鳴海城の抑え以外に活躍の場はありませんでしたが、発掘調査で砦跡は縄文時代から江戸時代までの複合遺跡として注目されています。遺物には縄文土器や灰釉陶器から近世の陶器。遺構としては弥生後期の竪穴式住居跡、奈良時代の住居跡、江戸時代の陣屋跡までが見つかっています。縄文時代から江戸時代まで、実に長い歴史とかかわりを持ってきた遺跡です。

後退した海岸線・寺と人家の移動

鎌倉街道が古鳴海・嫁が茶屋・赤塚・宿地・相原郷と内陸を通過していたので、人家もこの街道筋に集まっていましたが、天白川・扇川から搬出される土砂などにより海岸線が後退したことで、人々の通行は笠寺方面へ近い道として注目され、内陸から海岸よりを利用するようになっていきました。しかしこの新しい道は、しばらくは旅舎、茶店、休憩所などの施設はなく、人家もまばらで安全性も乏しく、あくまでも鎌倉街道が主体で新道は補助的な役目を担っているだけでした。

桶狭間の合戦により織田信長が天下に覇を称えるようになると、諸国との交流を活発化する楽市楽座の制度を設けたことで、街道の整備もこれまでより進むことになりました。天正３（1575）年には新しい道を路幅３間半（約6.5㍍）に改修し、橋を整備して道沿いに木を植えるなどをしています。海沿いの道が近道として注目されるようになり通行する人が増えてくると、新しい街道沿いに寺が移り、それにつれて人家も移動することになりました。

文明12（1480）年には淨泉寺が移り、万福寺、瑞泉寺などの寺院が、鳴海の街道近くに移動しています。民家も明応９（1500）年ころから移動がスタートし、新しい集落での生活がはじまっています。慶長５（1600）年ころにはほぼ現在のような町ができあがっています。町の移転によって鎌倉街道の通行は少なくなり、寂しくなると古街道と呼ばれるようになりました。

4　桶狭間の戦い

今川の勢力尾張圏に入る

天文21（1552）年、織田方だった鳴海城主山口左馬助教継は大高、沓掛両城を誘い今川方に寝返ってしまいました。今川義元はすぐに大高、鳴海両城に駿河の精鋭部隊を入れました。織田信長は同年４月、鳴海城を取り返そうと赤塚に攻め入り、寝返った山口側と戦いましたが、勝敗決まらず引き揚げています。その後信長は尾張統一戦に集中し、永禄２(1559)年岩倉城を攻略するなど尾張の安定に努めています。同年春、大高城に対して、丸根、鷲津両砦を、鳴海城に対しては、丹下、善照寺、中島の砦を築いて、両城の監視と兵糧封鎖を厳重にしたことで、今川方の大高、鳴海両城の維持が不安定となりました。

今川義元尾張進行を決断

駿甲相三国同盟により、東部の安定した今川義元は、三河の領地確保、尾張へ勢力を浸透させ上洛の足場を固めるため、永禄３（1560）年５月12日、２万５千の大軍を率いて駿府を出陣。同月18日に沓掛城に入りました。松平元康（徳川家康）に18日夕大高城に兵糧を搬入させ、翌19日早朝、丸根砦攻撃を、朝比奈泰朝に鷲津砦攻撃を命じ、両砦を占領しました。この戦いに鉄砲が使われたことが注目されます。

19日（陽歴６月22日）、義元は兵5000を率いて沓掛城を出陣し、大高道を進軍して瀬名氏俊が設営した「おけはざま山」の陣地に着陣。丸根、鷲津両砦攻略の報に「幸先好し」と謡を３番詠ったといわれています。

織田信長清須城を出陣

清須城の信長は、５月18日に「明19日早朝今川軍の丸根、鷲津両砦攻撃の公算大なり」と「今川勢がおけはざま山中腹に陣地を設営中。義元の本陣と思われる」の、二つの情報を得ていました。

19日早朝、丸根、鷲津両砦に対する今川勢の攻撃開始の報を受けると「人間50年下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり・・・」を舞。全軍に出動命令をだし、小姓５人を従えて清須城を出陣、熱田の上知我麻社の前で海上遥東に、二本の煙の昇るのを見て、丸根、鷲津両砦が陥落したことを知りました。信長は馬に鞭を打ち、上の道を駆け、天白、古鳴

桶狭間古戦場展望　昭和54年

海、丹下を経て善照寺砦に着くと、3000の将兵が待機していました。砦の周囲に大将旗を始め、幟旗を一杯に立て、信長本陣を明示しました。佐久間信盛に砦の守備を、佐々隼人正、千秋季忠に今川軍先陣への陽動作戦を命じました。

兵2000を扇川沿いに進め、信長は中島砦に前進しました。幕僚にこれからの作戦を語ると共に士気を鼓舞しました。このころ西の空には夕立雲が湧き立っていました。信長は現在の焼田橋付近より、待機させていた2000を率いて、神明（現在の四本木）の山際、東陵中学校付近から生山の麓を通り、夕立の中を武路の低地の雑木林、釜ケ谷（現在の桜花学園大学）に潜んでいました。このころ夕立は本降りとなり稲妻は四方に走り、雷鳴は山間に轟いていました。『信長公記』はその前後を「山際迄人数寄せられ候、俄に急雨石氷を投打つ様に・・・・余りの事に熱田大明神の神軍かと申し候なり」と書かれています。

信長、今川軍に突入

夕立雲は桶狭間の空を覆い雷鳴を轟かしていました。海抜40～50㍍の山上に陣取る今川軍5000は、鎧兜に身を固め、手には３～４㍍の槍を持ち、幟を立て、大将旗も高くはためいて、落雷の絶好の的となっていました。恐らく雷は容赦なく山上の今川軍に襲いかかったことでしょう。この自然の脅威になす術もなく武器や幟を捨て避難していたと想像できます。今川軍は織田軍の襲撃に少しも抵抗せずに退却しました。

『信長公記』には「弓、槍、鉄砲、幟、指し物、算を乱すに異ならず」、また「義元の漆輿も捨て崩れ逃れけり」とあり、落雷と織田軍の襲撃により今川軍の大混乱を物語っています。義元を中心に旗本の円陣で退却する今川軍を信長は馬から降り、執拗な攻撃を繰り返して今川軍を蹴散らしました。少数の旗本に守られながら義元は田楽坪に追われ織田方の馬廻り服部小平太に一番槍を受けるも小平太の膝口を切りましたが、毛利新助に組み伏せられ頸を打ち取られてしまいました。今川軍は追われ深田に逃げ込んでしまいました。

今川義元桶狭間合戦沈没之図　年英

『信長公記』は「おけはざまと云うところは、はざまくみて深田足入れ、高みひきみ茂り、節所と云う事限りなし。深田へ逃げ入る者は所さらはずはいずりまわるを、若者ども追付き・・・・一つ二つ三つ手々に頸をとり、御前に参り候・・・義元の頸を御覧じ、御満足斜めならず・・・いまだ陽のあるうちに清須に帰陣した」とあります。

戦評の松

桶狭間合戦で今川方の瀬名伊予守氏俊が松の根本に武将を集め、戦の評議をしたと伝えられています。松は立派に育ち、村人に「大松」とか「一本松」と呼ばれ親しまれていました。また、この松には伝説があります。通りかかった魚屋さんが、白馬にまたがり「無念」と叫ぶ今川義元の亡霊に出会い、姿を見たことは「誰にも話してはならぬ」の言葉を破り、こらえきれず仲間に話し、息絶えてしまうという物語になっています。松はこれまでに台風や虫害の被害を受けて、惜しくも枯死しています。現在の松は戦評定をしのぶ場所として植樹された３代目の松です。

信長の勝因

槍を主武器とした戦闘では、山上の方が絶対有利です。桶狭間の戦いは、今川方は40～50㍍の山上に本陣を構え、織田方は西北から攻撃しています。釜ケ谷にいた信長は今川方の陣地に近づくには坂を駆け登り、鎧兜で４㍍近くの長槍で敵を倒すには並外れた体力と技術が必要で、少数にて戦いに勝利するのは不可能に近いと考えられます。桶狭間の戦いも普通の戦いであれば、織田側の勝目はほとんどありません。しかし結果は織田方の勝利に終わっています。それには大雷雨の落雷による今川軍の大混乱を知り、間髪を入れずに突入した信長の決断にあると思います。これは、徹底した合理主義者である信長が、戦後

熱田神宮に築地塀を寄贈しているのは、自然の力を借りて勝利した事の証拠ではないでしょうか。

近世の曙

信長は桶狭間の戦いから７年後、美濃を制圧し岐阜と改め、天下布武を宣言、諸国に兵を進めました。一方、城下町を中心として「兵農分離」「楽市楽座」「インフラ整備（道路整備）、治水工事」「関所、関税の廃止」「撰銭令（えりぜにれい）発行（悪質な貨幣の流通を禁止させた）」「検地」などの諸政策を進めて近世の基礎を固めました。

織田信長と今川義元銅像「近世の曙」

桶狭間の戦いは、日本の統一へと向かう重要な戦いで、多くの研究者が様々な角度から研究の成果を発表し、戦いについて諸説ありますが、織田信長が桶狭間の戦いにて勝利し、この名古屋市緑区桶狭間から信長を天下に送り出したのは紛れもない事実です。

平成22（2010）年に桶狭間の戦いから450年を迎え、記念式典を開いたほか、記念事業として、桶狭間古戦場公園を合戦の様子がわかるジオラマ公園として整備され、建立された織田信長と今川義元両将の銅像は「近世の曙」と命名されました。

長福寺

宗派西山浄土宗。和光山天沢院と号し、天文７（1538）年の創建です。

永禄３（1560）年、桶狭間合戦のとき、開山善空南立上人は、今川勢が当地に着くと、住民の先達となり酒食を供しその労をねぎらったと寺伝は伝えています。今川義元に仕えていた茶坊主林阿弥は織田方に捕らえられましたが、首実験の検証に立ち会い助けられました。林阿弥はのちに供養のため阿弥陀如来と義元念持仏の文殊菩薩を持参しました。本尊阿弥陀仏はそのときのものと伝えられています。寺宝には今川義元、その家老松井宗信の木像、合戦記、供養塔などがあります。惣門は鳴海の千代倉が寄進しています。境内の放生池の傍らに今も地下水の湧き出る池があり、南朝の落人が隠れ住んだときの水源ともいわれています。

5　村々の由来－鳴海・桶狭間・有松・大高

鳴　海

鳴海の名の由来は正確なことはわかっていません。文字がなかったころすでに「なるみ」の地名がありました。奈良時代以降「奈留美」「成留美」「鳴身」「成海」といろいろ名称で書かれてきました。成海神社の成海は固有名詞として長く使われてきました。

地名としては源順の編纂で承平年間（931～38）成立の我が国最初の分類体百科事典『和名類聚抄』に成海郷と書かれています。江戸時代には鳴海庄となっています。また、弘治３（1557）年の織田信長の朱印文には鳴海とあり、永禄年中（1558～70）の今川義元の成海神社・八幡宮への神領寄進状も鳴海と書かれています。

日本武尊が松炬島（今の星宮）と火高（今の大高）とを往復された時詠まれた歌に登場する「奈留美良乎　美也礼波止保志　比多加知爾」の「奈留美良」の「良」は古来添え字あるいは「浦」の意味に解されていますが、アイヌ語の発意でナルミナの変化で「ナ」は海、「ルミナ」は微笑で「おだやかな海」という固有名詞との説もあります。

相原郷

慶長13（1608）年鳴海から分村しましたが、明治９（1876）年に、再び鳴海とひとつになりました。

平手新田

慶長13（1608）年鳴海から分村しました。承応２（1653）年縄入れの新田で、明治９（1876）年相原と同じように鳴海とひとつになりました。

桶狭間

桶狭間で人々の生活がいつから始まったかは正確にはわかっていません。二つの朝廷が争う南北朝の戦いに敗れた南朝の武者が、1350年ころ山間の谷間で農業をして生活するようになりました。

このあたりの山には、多くの洞穴があったので、はじめは「洞（ほら）」と言われていました。その「洞」と「狭間」がつながって「ホラハザマ」と呼ばれました。そして「洞」をこの地方では「ホケ」と呼ぶことから「ホケハザマ」と呼ばれるようになりました。このホケハザマが、いつのころからか「オケハザマ」に変わっていきました。

地名は洞迫間が起源のようで、「ホケ」が「オケ」に転じて桶狭間となったとされていますが、街道を通る人々の喉を潤すため、水汲み用のオケが泉に浮かべてあり、その桶が湧き出す水の勢いでグルグル回る様子から、桶廻間と呼ぶようになったとも言われています。

16世紀以前には洞迫間・公卿迫間でそれ以降は桶迫間・桶廻間・桶狭と書かれていました。明治11（1878）年の地方制度改正によって「桶狭間」の字があてられることになりました。

有　松

有松は慶長13（1608）年に尾張藩が出した触書によって誕生しました。慶長８（1603）年に徳川幕府が開かれ、江戸と京を結ぶ東海道を整備しましたが、鳴海宿と池鯉鮒宿の間は松林が茂り人家もなく、追剥や盗賊が出没する物騒な街道でした。

そこで、尾張藩は桶狭間の支郷として新しい集落を開き、旅人の安全をはかることにしました。免税という特権を付けての移住呼びかけに、阿久比から８人が応募してスタートしましたが、谷に囲まれた狭い土地は農業には向かず、新しい産業（絞）を興すことで生活の糧としました。有松という名称は、松が生い茂っていたからという説と、新町（あらまち）が転じて有松と呼ばれるようになったという二つの説があります。

有松は、平成20（2008）年に開村400年を迎え記念式典のほか、提灯行列などさまざまなイベントを１年間、東海道の町並をメーン会場にくり広げました。

大　高

大高は古くは氷上邑と呼ばれていました。氷上として『寛平熱田縁起』にも掲載されています。氷上の名は「氷上姉子神社」の社名によって現在にまで伝えられています。

同縁起の中の日本武尊の歌に「比多加知」とあり、本居宣長の『古事記伝』には、「比多加地は火高地なり」と紹介しています。また「氷上とも火高ともいいしなるべし」と書かれています。古事記伝に引用されている『熱田社或書』には「氷上邑は後に火高の里という」と記されています。

氷上邑・火高の里であったこの地がいつ大高と改められたのでしょう。前記の『熱田社或書』には「回禄により火高を改めて大高という」と記されています。回禄は火災で焼けることで、火災から大高への改名のことは、氷上姉子神社祠官の文書によっても明らかにされています。それによると、永徳２（1382）年に火災が起き、社殿や民家に多くの被害があったので、「火」の字を改めて「大高」としたと記されています。寛正６（1465）年『蜷川親元日記』には大鷹郷と書かれていますが、久米家の文書には永正（1504）ころから一貫して大高となっています。大高の地名は全国にあり、一般的に丘陵状の場所につけられているとされ、字形が似ているので火が大になったともいわれています。『寛文村々覚書』・『尾張徇行記』には大高之庄西大高村とあります。